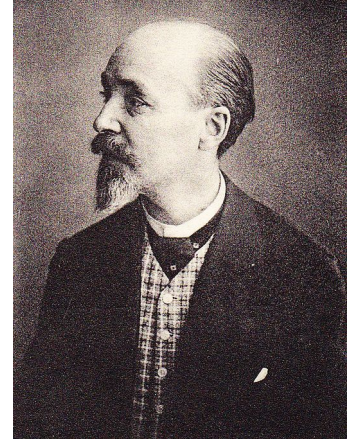


## マックス・エルスカンプ (Max Elskamp, 1862-1931)

### 略歴

マキシミリアン・エルスカンプは、1862 年 5 月 5 日、アントワープのサン＝ポール通り (St. Paulsstraat) にて、銀行員の父と音楽家の母親との間に生まれる。裕福な家庭で育ち、8 歳の頃にレオポルド大通りの館に引っ越す。臆病で控えめな性格で、母親のスカートから離れたことがなかったマックス・エルスカンプは、学校では嘲笑の対象となるが、そこで彼を守ってくれたのが後に終生の友となるアンリ・ヴァン・デ・ヴェルデ（後にベルギーのアール・ヌーヴォー創始者の一人となる建築家）であった。二人は毎週木曜日に港に行き、再開発により変わりゆく港町の風景を眺めながら散策を行っていた。学校では勉強よりも絵を書いたり文章を書いたりすることを好み、ユゴーよりもヴォルテールやフローベールに親しんだ。特にロングフェローの『ハイアワサの歌』に夢中になり、翻訳も行った。



1880 年、マックス・エルスカンプはブリュッセル大学に入学し、法律を学ぶ。在学中にジョルジュ・クノップフ（詩人・翻訳家として画家である兄のフェルナン・クノップフと共にベルギーにおける象徴主義の思想の普及に努めた）と出会い、ヴェルレーヌ、ランボー、マラルメ、コルビエール等の詩人を知る（実際に評価をするのは 1890 年代になってから）。この頃、マリア・ド・マティスという女性と出会い恋をする。1883 年 4 月 18 日、母を失くす。1884 年にマリアと婚約破棄。同年 11 月にこれまで書いてきた自分の作品を全て燃やす。1886 年 5 月 5 日に『日本の扇子 (Éventail japonais)』と題されたソネ詩集を発表<sup>\*1</sup>。印刷は 50 部のみで、友人など親しい人にのみ頒布した。彼の作品の多くは、出版社を通したのではなく、自ら印刷や編集を行っていた。執筆から、レイアウト、版画等のデザインや挿絵、紙やフォントの選択、印刷まですべてを自分で行い、小部数で発行し、友人、知識人、ジャーナリストなど一部の人々に自ら送り届けた。

1887 年、ヴァン・デ・ヴェルデは、1884 年に行われたパリのアンデパンダン展に倣って、ベルギーでも独立芸術家協会を設立した。エルスカンプもその幹事を務め、展覧会のカタログなどに多くの文章を寄稿した。1890 年 2 月にマラルメを、1893 年にヴェルレーヌをアントワープに招く。

1892 年、*Dominical* を発表。ヴェラーレンやピカール、メーテルランクラからも高い評価を受けた。マラルメは『『ドミニカル』は、私たちの中に埋もれている多くの喜びや純真さを呼び起こし、忘れていた歌を巧みな仕方で呼び起こしてくれるもの』と手紙でエルスカンプに書き送っている（1912 年には、ポール・ラドミローが同詩集を元にした曲を制作している）。

1893 年、*Salutations, dont d'Angéliques* を発表。ベルギーでは評価されたが、フランスでは評価されず「ラフォルクグの物真似」と揶揄されてしまう。その後、*En symbole vers l'apostolat* (1895), *Six chansons de pauvre homme pour célébrer la semaine de flandre* (1895) を発表し、1898 年に一冊の詩集 *La louange de la vie* として編まれる。この頃に、印刷技術や木版画にも興味を持ち、自前で印刷機を作り、「ヒバリ」（« L'Alouette »）と名付けた。

\*1. Cf. <http://www.aml-cfwb.be/catalogues/general/titres/178043>

1900 年、フランシス・ジャムと出会い、アントワープに招く。ジャムと同様、エルスカンプは貴族的な世界やブルジョア的な生き方を拒否し、民衆的・庶民的な生活を好んだ。また、土地固有の文化といった民俗学的なものにも興味を持ち続け、アジアの宗教や、美術にも関心を寄せていた。1901 年、精密なダイヤル式温度計を発明し、特許を取得。1903 年に妹を、1911 年に父を亡くしてから、本格的に仏教の教えに傾倒するようになる。

1914 年、ドイツ軍によるベルギー襲撃。レオポルド大通りのエルスカンプの館も爆撃され、執事と 18 時間歩いて、オランダ国境へと亡命する。ドイツ軍の非道さやオランダ人の冷淡さに失望し、鬱状態になる。

1916 年、ヴァン・デ・ヴェルデらの尽力により、ドイツ占領下のアントワープの家に帰ることが許される。終戦後、集中的に作品を書きあげていく。この頃から記憶障害や、幻聴を耳にするなど、精神に異常をきたすようになる。爆撃を受けたアントワープの街は、後に復元されたが、新しい建物が立ち並ぶ近代的な風景にエルスカンプは馴染むことができなかった。1922 年には *Chansons désabusées*, *La chanson de la rue Saint-Paul* を出版。1923 年、*Les sept Notre-Dame des plus beaux métiers*、*Les délectations moroses*、*Chansons d'Amures*、*Maya* を発表。1924 年には歩行障害となるも、*Remembrances* と *Aegri Somnia* を書き上げる。1931 年 12 月 10 日、長年の精神異常の末に、孤独に死去。

### 主要著作

- *Éventail japonais*, 1886.
- *Dominical*, Bruxelles, Éd. Paul Lacomblez, 1892.
- *Salutations, dont d'Angéliques*, Bruxelles, 1893.
- *En symbole vers l'apostolat*, Bruxelles, Éd. Paul Lacomblez, 1895.
- *Six chansons de pauvre homme pour célébrer la semaine de Flandre*, Bruxelles, Éd. Paul Lacomblez, 1895.
- *La Louange de la vie*, Paris, Mercure de France, 1898.
- *Enluminures*, Bruxelles, Éd. Paul Lacomblez, 1898.
- *L'Alphabet de Notre-Dame La Vierge*, Anvers, 1901.
- *Les commentaires et l'idéographie du jeu de loto dans les Flanders, suivis d'un glossaire*, Anvers, A. de Tavernier, 1914.
- *Sous les tentes de l'exode*, Bruxelles, Robert Sand, 1921.
- *Chansons déabusées*, Bruxelles, G. Van Oest, 1922.
- *La Chanson de la rue Saint-Paul*, Anvers, H. C., 1922.
- *Les sept Notre-Dame des plus beaux métiers*, Anvers, A. de Tavernier, 1923.
- *Les Délectations moroses*, Bruxelles, G. Van Oest, 1923.
- *Chansons d'amures*, Anvers, Buschmann, 1923.
- *Maya*, Anvers, Buschmann, 1923.
- *Remembrances*, Anvers, Buschmann, 1924.
- *Aegri Somnia*, Anvers, Buschmann, 1924.

＊この他多数の未刊行詩が Seghers 版の全集に収められている。

## La Chanson de la rue Saint-Paul — サン＝ポール通りの歌

### Préface — 序

- |                            |                 |
|----------------------------|-----------------|
| 1 Musiques ici             | 君の人生を           |
| 2 Faites de ta vie,        | 彩る音楽がここにある、     |
| 3 À son aube luie          | その夜明けは今日        |
| 4 Lointaine aujourd'hui,   | 遠いところで輝いていた、    |
| 5 Ce sont jours allés,     | 過ぎ去った日々、        |
| 6 De soleil ou pluie,      | 晴れた日や雨の日、       |
| 7 Au cours des années,     | 長きに渡る時も、        |
| 8 Désormais pâlis.         | 今では色あせた。        |
| 9 Or en l'ombre en eux     | だがこうした日々の陰で     |
| 10 Ici qui prend place,    | 居座るものがここにいる、    |
| 11 Ainsi que le veut       | すべて消し去る時が       |
| 12 Temps qui tout efface,  | そう望むように、        |
| 13 Mais en toi restée      | けれど君の中では        |
| 14 Leur clarté si blanche, | 時の煌めきが残されている、   |
| 15 Qu'il t'en est dimanche | その真白さは君にとっては日曜日 |
| 16 Rien que d'y penser,    | ただそのことを思うだけ、    |
| 17 C'est de candeur pure,  | それは君の純白さだ、      |
| 18 Sous des soleils Luis,  | 輝く陽光の下で、        |
| 19 Jours et qui te furent  | 日々、そしてかつて       |
| 20 Jadis, que voici.       | 君だった人が、今ここに。    |

### I — 第一の歌

- |                            |                |
|----------------------------|----------------|
| 1 C'est ta rue Saint-Paul  | サン＝ポール通りは君のもの  |
| 2 Celle où tu es né,       | 君はそこで生まれたんだ、   |
| 3 Un matin de Mai          | 五月のある朝に        |
| 4 À la marée haute,        | 潮が満ちる頃、        |
| 5 C'est ta rue Saint-Paul, | それは君のサン＝ポール通り、 |

- 6 Blanche comme un pôle,  
7 Dont le vent est l'hôte  
8 Au long de l'année.
- 9 Maritime et tienne  
10 De tout un passé,  
11 Chrétienne et païenne  
12 D'hiver et d'été,
- 13 Le fleuve est au bout  
14 Du ciel qu'on y voit,  
15 Faire sur les toits  
16 Noires ses fumées,
- 17 De grands vaisseaux roux  
18 De rouille et d'empois,  
19 Y tendent leurs bras  
20 De vergues croisées,
- 21 Maritime en tout  
22 L'air que l'on y boit,  
23 Sent avec la mer  
24 Le poisson sauré,
- 25 C'est ta rue Saint-Paul  
26 Ta rue bien aimée,  
27 Où le fleuve amer  
28 Monte ses eaux hautes,
- 29 C'est ta rue Saint-Paul  
30 Blanche comme un pôle,  
31 Et dont tu fus l'hôte  
32 Pendant des années.
- その白さはまるで極地、  
潮風は一年を通じて  
泊まっている。
- 海が、君が手にするもの  
すべては過去にある、  
夏も冬も  
キリスト教と異教徒がいる、
- 私たちが見る  
空の果てには河、  
黒い屋根の上空で  
河の煙が広がっている、
- 錆と糊で赤くなった  
大きな船が、  
十字型の帆桁を広げて  
迎え入れる、
- そこで飲み込む空気は  
みな海にまつわるもの、  
海と共に嗅いでいる  
燻製された魚の匂いを、
- それは君のサン＝ポール通り  
君が大好きなこの街路で  
苦い流れが  
水位を上げていく、
- それは君のサン＝ポール通り  
その白さはまるで極地、  
君は何年ものあいだ  
そこの住人だった。

## Aegri Somnia — 病的夢想

## IV Dimanche anglais — IV. 英国の日曜日

- |  |                    |
|--|--------------------|
| 1 Il fait dimanche,                      | 日曜日、               |
| 2 Il fait dimanche,                      | 日曜日、               |
| 3 Sur le canal bleu de la Manche,        | 英仏海峡の青々とした海で       |
| 4 Et vent levé                           | 颶風が                |
| 5 Soufflant grand-frais,                 | 吹き荒れて、             |
| 6 Un brick anglais                       | 英国の帆船が             |
| 7 Court au plus près,                    | 順風を受け進む            |
| 8 Bâbord amures, voiles blanches,        | 左舷は風上、白い帆が         |
| 9 Dans le dimanche,                      | 日曜日に               |
| 10 Dimanche anglais.                     | 英国の日曜日に。           |
| 11 Or soleil clair                       | 黄金 澄んだ太陽           |
| 12 Et choses nettes,                     | そして汚れなきもの          |
| 13 Côtes qu'on voit montées dans l'air,  | 沿岸部が空に立ち上っていくのが見え、 |
| 14 Et sur l'eau verte                    | 緑がかった水の上で          |
| 15 Dire la terre,                        | 大地と言う、             |
| 16 Falaises, plus loin                   | 断崖は、遙か彼方に          |
| 17 Qui s'achèvent                        | 藍鼠色で               |
| 18 Dans du gris-bleu, comme en les rêves | 幕を閉じる、まるでそれは       |
| 19 Faits après vin                       | 夜更けまで飲んだワインの後で     |
| 20 Bu sur le tard,                       | 見る夢のよう、            |
| 21 Lors nuées blanches                   | 白い雲の群れが            |
| 22 Et qui s'affaissent,                  | 凹んでいくとき、           |
| 23 On dirait d'anges pris d'ivresse,     | 天使たちが酔っているようだ      |
| 24 À Dungeness                           | ダンジェネス<br>海辺の町の    |
| 25 Autour du phare.                      | 灯台のあたりで。           |

Max Elskamp, *La Chanson de la rue Saint-Paul et autres poèmes*,  
Paris, Gallimard, coll. « Poésie/Gallimard », 1997, p. 277-278.

## Les Limbes — 辺獄

### Maya — マーヤ

1 O Maya, c'est toi et que j'aime,  
2 Et malgré ce qu'a dit Bouddha,  
3 C'est toi l'illusion suprême,  
4 Qu'en ma vie j'ai connue en toi,  
  
5 Vraie dans mes rêves, dans mes songe  
6 Et non fausse comme il t'a dite,  
7 Et en t'accusant de mensonge  
8 Alors ainsi, par lui maudite.  
  
9 O Maya, et dont le levain  
10 Dans les contingences humaines,  
11 Est de faire entités certaines  
12 De ce que l'on espère en vain,  
  
13 Et qui nous donne le divin  
14 Même en les choses de la terre,  
15 Dites de verdure ou de pierres,  
16 Dans l'heure ainsi qu'elle vient,  
  
17 C'est toi Maya, qui es la foi  
18 De ceux qui pensent ou qui rêvent,  
19 Et sachant que dans la vie brève,  
20 Le vrai n'est qu'en la mort, les croix,  
  
21 Et que le bien qu'on peut trouver  
22 N'est que l'illusion en soi,  
23 Mais alors et de vérité  
24 Puisqu'on la touche et qu'on la voit,  
  
25 Et apportant la paix sereine  
26 Qui est alors enclose en tout,  
27 Comme de Dieu serait l'haleine,  
28 Si elle était entrée en nous.

ああ、マーヤ、私が愛するのはあなた  
仏陀が言ったことにも関わらず、  
人生において至高の幻想であるあなたを  
あなたの中で私は知った

私の夢、夢の中で  
真なるあなたに偽りはない  
彼があなたのことを嘘つきと咎めたので  
あなたは彼によって呪われた。

ああ、マーヤよ、人間の  
些細な出来事から来る種は、  
人が甲斐なく願うものを  
確かな存在に作り上げる、

それは私たちに神性を与える  
緑や石と呼ばれている  
大地の事物においてさえも  
来たるべき時に与えてくれる、

マーヤ、あなたこそが  
考え、夢見る人の教えであり、  
知っているのだ、儚い生において  
真なるものは、死、十字架だけであると、

そして見つけることのできる善が  
それ自体は幻想に過ぎないけれども、  
手で触れ、目にすることで  
それが真理であると知っているのだ、

もしも息吹が私たちの中に入ってきたら、  
それがまるで神のものであるかのように  
すべてを包み込んで  
静謐な平和をもたらしてくれる。

- |   |  |
|---|--|
| <p>29 O Maya, toi, sois lors bénie,<br/>         30 Par nos cœurs comme par nos âmes,<br/>         31 Par nous les hommes et les femmes,<br/>         32 Et comme la lumière luie,</p> <p>33 Toi qui tues les doutes en nous<br/>         34 Nous donnant alme quiétude,<br/>         35 De tout amour en des jours doux<br/>         36 Dont l'amertume alors s'élude.</p> | <p>ああ、マーヤ、その時君は祝福されよ、<br/>         私たちの心によって、私たちの魂によって<br/>         我ら男性、女性によって、<br/>         まるで光が輝くようにして、</p> <p>私たちの中にある疑念を殺すあなた<br/>         私たちに恵みとなる平穏を与える<br/>         甘い日々のすべての愛を込めた<br/>         そして苦味は抜けていく。</p> |
|---|--|

Max Elskamp, *Œuvres complètes*, Paris, Seghers, 1967, p. 858-859. D'après photographie de la copie dactylographiée déposée à la Réserve Précieuse de la Bibliothèque Royale de Belgique (Anvers, J. E Buschmannm, s. d.)

## 参考文献

- AUBERT Nathalie, « Max Elskamp : L'Espace du Retrait? », *Dix-Neuf*, vol. 22, n° 3-4, 2 octobre 2018, p. 191-203.
- BERG Christian, « Max Elskamp et la syntaxe de la ville », *Les Lettres Romanes*, vol. 40, n° 3-4, août 1986, p. 245-253.
- BIVORT Olivier, « Le premier Elskamp », *Textyles. Revue des lettres belges de langue française*, n° 22, Ker éditions, 1<sup>er</sup> février 2003, p. 9-20.
- BOSQUET Alain, « Les murmures incantatoires de Max Elskamp », *Le Monde*, 25 juillet 1997.
- CASSOU Jean, « La Mort de Max Elskamp », *Les Nouvelles littéraires*, 19 décembre 1931.
- ELSKAMP Max, *Œuvres complètes*, Paris, Seghers, 1967.
- ELSKAMP Max, *Max Elskamp*, Robert Guiette (éd.), Paris, Éditions Pierre Seghers, coll. « Poètes d'aujourd'hui », 1955, 1 vol.
- ELSKAMP Max et Jean de BOSSCHÈRE, *Max Elskamp et Jean de Bosschère. Correspondance (1910-1923)*, Bruxelles, Palais des Académies, 1963.
- GORCEIX Paul, « Réalités flamandes et symbolisme : Max Elskamp (1862-1931) », *Revue d'Histoire littéraire de la France*, vol. 87, n° 4, 1987, p. 733-744.
- HALLWORTH Anne-Marie, *L'Evolution de la pensée religieuse de Max Elskamp*, Unpublished Master's Thesis, Calgary, University of Calgary, 1992.
- LAOUREUX Denis, « Dans le grenier de la poésie : Max Elskamp et l'image. L'écrivain-plasticien belge, une figure (a)typique,? », *Textyles. Revue des lettres belges de langue française*, n° 22, Ker éditions, 1<sup>er</sup> février 2003, p. 49-60.
- OTTEN Michel, « Un aspect de la pensée religieuse de Max Elskamp », *Bulletin de l'Académie Royale de Langue et de Littérature Françaises*, XXXVI, n° 1, 1958, p. 37-48.
- SCEPI Henri, « Le rythme du chant (à propos de Max Elskamp) », *Textyles. Revue des lettres belges de langue française*, n° 22, 1<sup>er</sup> février 2003, p. 33-42.